

『飛び立つ前に』

作：フロリアン・ゼレール 演出：ラディスラス・ショラー

Avant de s'envoler

Avant
de
s'envoler
Written by Florian Zeller
Translated by Atsuko Chollat
Directed by Ladislav Chollat
飛び立つ前に

解決しにくい家族の悩みが、観客の心に響く

フロリアン・ゼレール作『飛び立つ前に』は、親子やカップルの葛藤を追う。

親密な者同士の愛憎が絡む謎めいた芝居の醍醐味を、若村麻由美と岡本圭人に聞く。



WAKAMURA Mayumi

ゼレールが著した『飛び立つ前に』は家族三部作『Le Père 父』『Le Fils 息子』『La Mère 母』とともに、国境を越えて上演され賞讃を浴びている。ラディスラス・ショラーが日本で演出を手掛けた『息子』と『母』では、若村麻由美と岡本圭人が母子に扮した。『飛び立つ前に』では若村が演じるマドレーヌの次女エリーズの婚約者で、不動産業者のポール役を岡本が担う。古い、別れなど厳しい状況を扱いながら、同作は夢や幻に似たシーンも宿す。詩情も流れる不思議な戯曲の特質を、若村が情熱をこめて語る。「いろいろな方面にクエスチョンを投げかける展開に、怒濤のように巻き込まれてしまう。そういった構成が、ゼレール作品らしいところですね。これはどういうことかしら……、謎を解こうとしながら翻弄されていく面白さもあります。また、各作品に出る家族は全て別なのに、今作の父アンドレ、長女アンヌといった人物の名前は『父』と同じです。どこにでもいる家族と印象づける設定は、お客様の共感を導く糸口になりうるでしょう」

岡本は目を輝かせて「多様な解釈ができる戯曲だからこそ、ラッド（演出家ショラーの愛称）との稽古が待ち遠しい」と続ける。「ポールがマドレーヌの家族に何をもたらすのか、戯曲では示されません。分かなささもフロリアン戯曲の魅力。前の2作でラッドと向き合ううち、答えはお客様に探してもらおう、という感覚が生まれました。自分自身も答えが用意された作品より、見た後に自ら推測する作品が好きです。稽古場でラッドの演出を受けると、自分の考えの遙か上のレベルのことに気づきます。魔法にかかったように、以前は想像もつかなかった演技が、次々と引き出されていくんです」

4作目のゼレール戯曲に臨む若村は、マドレーヌ役を引き受ける際の迷いを明かす。『『父』における私の役は、橋爪功さんが演じる認知症の父親への愛と、自分の進む道に引き裂かれ、苦渋の決断を下す娘。『息子』と『母』では大切な子どもが遠ざかるのを嘆く母でした。今回は娘2人の母親でもあります。作家の夫をもつ妻という面が大きいですね。橋爪さんのように人生経験を積み上げてきた俳優と、50年間連れ添った夫婦を演じられるのか、不安もあります。でも、お客様の想像とともに舞台を創る、演劇ならではの力で成立させよう、と勇気を奮って飛び立ちました。いろんな体験を経た、包容力の大きいマドレーヌを演じたい。夫や娘との関係という中身を作っていた結果、形ができる、という方法がいいのかなと思っています」

岡本は『飛び立つ前に』がはらむ緊張感に惹かれる。「舞台にいる人物の生存が曖昧な場面も含む、スリリングな戯曲です。日常生活でも大切な人

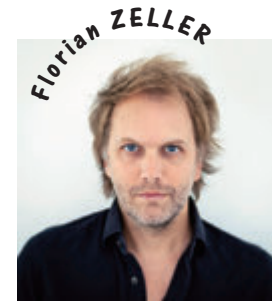


OKAMOTO Keito

を失ったら、その人がいた時の出来事を省みたり、もし今ここにいればとイメージしたりするでしょう。残された者が思い入れを抱くのは、深い愛情と一緒に過ごした時間が胸に残るから。『飛び立つ前に』のドキッとする要素を表現できたら、お客様の記憶と響き合うかもしれません。虚実の境を溶かす力が、フロリアンの戯曲とラッドの演出の中であって、そういうところは心が締めつけられるけれど……、素晴らしいって思うんです」

登場人物の意識を重層的に描く効果を、若村が説く。「家族三部作の舞台では、妄想や後悔に駆られる人物の内面が迫ります。生涯の終盤を襲う病変も、理性を失わせる動揺も、誰にでも起こりうるんですね。そのリアリティが伝わると、お客様は人生を芝居に重ねやすくなって、劇場には豊かな時空間が育まれます。『飛び立つ前に』は家族の間に疑念が湧く物語。でも、他のフロリアン戯曲を読んだ時と同様に、人間は美しい、と感じます」

取材・文：桂真菜（舞踊・演劇評論家）



©samuel_kirszenbaum



11月23日(日)～12月21日(日)
シアターイースト 詳細はP10、12へ

作：フロリアン・ゼレール
演出：ラディスラス・ショラー
出演：橋爪功 若村麻由美
奥貫薫 前田敦子
岡本圭人 剣幸

兵庫、島根、宮崎、
秋田、富山 公演あり

